蝶とイモムシとイチョウの葉

高松市立太田中学校　二年　井上　芽依

ゴトン、ゴトン、ゴトン。

重苦しい音を立てて電車が後ろへと流れていく。

フェンスに挟まったまだ青いイチョウの葉が、風にあおられてバタバタともがいている。

「しんどいなあ」

五月の終わり、夕方の帰り道。一年生の頃は良かったな、といつも思う。クラスには仲良しの子ばっかりで、「中学生になったこと」それが嬉しくてたまらなかった。

中学生もそこまで良いものじゃないと感じ始めた矢先、クラス替えはやってきた。仲が良い子と引き離され、男子も女子もアゲハ蝶みたいにギラギラした中にたった一匹放り込まれた地味なイモムシ。それが私。前のクラスの子達は早々に新しいクラスになじみ、交流が途絶えてしまった。

疲弊した身体をずるずると引きずって、長い長い一本道を進む。

遠くの田んぼで蛙が鳴いている。

いつまで続くのだろう、こんな日々は。

「…」

ピンチ到来。急募、私の勇気。

私の前で机にうつ伏せになって寝ている女子、中村（なかむら）アカネ。この学校の人なら誰でも知っている有名人で、学年中のアゲハ蝶が集まったうちのクラスの中でも、とりわけギラギラしている。そんな人に、私は今から話しかけなくてはならない。

「次移動教室だから、喋ってないでさっさと準備！　遅い人は置いていくぞ！」

と、委員長のでっかい声が教室に響いていたのが五分前。

その委員長に、

「え、中村寝てるじゃん……。悪いんだけど沼田（ぬまた）さん、そいつ起こして鍵閉めてきてくれる？」

と、強制的に中村さんと鍵を押し付けられたのが三分前。

どうして、委員長とも中村さんとも喋ったことが無い私にそんな事を頼むかなあ、とか、その火災報知器みたいな声の使い時は今じゃないのかなあ、とか、言いたいことはいろいろあったけど、委員長サマの、、それでなくともアゲハ蝶サマの命令を断れるようなイモムシはいない。

でもやっぱり話しかけるのは怖くて、三分間も中村さんの前に突っ立っていたけれど、そろそろ授業が始まってしまう。話しかけるのが怖いなんて言っていたら遅刻する。

大丈夫、なにも取って食われる訳じゃない。

大丈夫、大丈夫。がんばれ、私！

「にゃ、にゃかむらさん！」

最悪、思いっきり噛んでしまった。聞かれてないかな、と相手の方をうかがう。

「はあい、にゃかむらちゃんに何か用ー？」

目の前には、にやっと笑う中村さん。

「っ！」

起きてる、聞かれてた、というか、怖い！　でももう後戻りできない。いけっ、私！

「つっ、次移動教室なので、その……」

「あ、ホントだ、みんないなーい」

中村さんはあっけらかんと言い放つと、のそのそ立ち上がって準備をし始めた。

鍵を閉めて、二人並んで廊下を歩く。

「てゆーかさ、沼田ちゃんだっけ」

「はいっ、沼田ですっ」

「沼田ちゃんさあ、わざわざ残ってあたしを起こしてくれたんでしょ？　まじありがとね」

「いえ、委員長に頼まれただけなので」

「んーん、ガチ感謝！　あ、あたしのことは茜（あかね）って呼んでー。敬語もナシで」

「うん、分かった、アカネちゃん」

「ふふ、よろしくー」

アカネちゃんが笑った。ふわっと、柔らかい風が吹いてきたみたいだ。中村アカネは、案外怖くないのかもしれない。

委員長がいなきゃ気付けなかったな。ありがとう、委員長。火災報知器なんて言ってごめんね。

窓の外へ顔を向けると、アジサイの鮮やかなピンクが見えた。

日に日に強くなる日差しに、むくむくと湧き上がる入道雲。それらをバックにして行われ

るセミの大合唱。
夏休み、部活三昧だ。
先輩たちは先週の大会をもって引退し、私たち二年生の代がやってきた。二年生は自分たちが部を引っ張っていくべく、一年生は本格的に部に加わることが嬉しく、みんな張り切っている。
私は部活があまり好きではない。一応かじったことのある競技を選び、真面目に練習をしてきたはずが、未経験の同級生にまで追い抜かれていった。中にはキャプテンになった子もいる。要領が良い子は、羨ましい。
「ちょっと休憩しようかな」
ぼそっと呟き、水筒を持って立ち上がる。体育館は飲食禁止だから、わざわざ外に出て靴箱の方で給水をしなくてはならない。
靴箱へ向かう途中から、甲高い笑い声が聞こえてきた。きっと、特有のオーラとギラギラした雰囲気に包まれたアゲハ蝶の群れがあるのだろう。そしてその中心には間違いなく、中村アカネがいるのだろう。
羨ましい。可愛くて、スタイルが良くて、いるだけで場が華やぐ。幼い頃からなんでもできて、たくさんの人に囲まれて、そうしてみなぎる自信を身につけていったのだろう。いいな、いいな、……妬ましいな。
太陽が照って、じりじりと肌を焼く。とめどなく汗が流れる。私の中のどす黒い、醜い感情も、汗と一緒に流れてくれたらいいのに。
蝉時雨は、いつの間にか止んでいた。

「ねえ、あのポスター描いたの沼田さんなんでしょ」
「そ、そうです……」
九月、新学期始まってすぐの放課後。今日の六時間目の美術では、夏休みに描いたポスターを提出した後に時間が余ったので、プチ鑑賞会を行っていた。
「センセーにも褒められてたじゃん？」
「ほんとにー。上手すぎてびっくりしたわ」
目が、笑っていない。
赤木さんに篠田さん。中村アカネには及ばずとも、二人共立派なアゲハ蝶だ。赤木さんの方は、絵画コンクールの入賞常連だった気がする。なんだろう。よく分からないけど。純粋に作品を褒められてはいない。
こんな時、なんて返せばいいのかな……。
「あ、えっと、その」

「あははー。めっちゃどもるじゃん」
「キンチョーしてるう？」
乾いた笑い声。四つの真っ黒な目が私を見下ろしてくる。頭が真っ白になる。怖い……。
怖い怖い怖い怖い怖いこわいこわい……。
だ れ か た す け て ……。

「あれ？　赤木と篠田って、沼田ちゃんと仲良かったっけ」
いつの間にか、背後にアカネちゃんが立っていた。
二人の顔がみるみる引きつっていく。
「いや、ちょっとお話してただけ」
「そうそう、じゃあ、うちら行くわ」
赤木さんと篠田さんがそそくさと去っていく。助かった……。
「え、わっ、わっ、泣かないで、沼田ちゃん！　えーと、ティッシュ、ティッシュ……」
あ、私、泣いてるのか。
「こ、怖かったぁ……。ありがとう、アカネちゃん……」

「そろそろ落ち着いたかな」
私は数分間にわたり泣き続け、アカネちゃんはずっと私のそばにいてくれた。
「うん。ごめんね、いっぱい泣いちゃって」
中学生にもなって人前で大泣きするなんて、恥ずかしい。
「いいよぉ、全然」
横を向いて座っていたアカネちゃんが、こちらに向き直った。
「ただね、一つだけ言うなら、沼田ちゃんはもっと自信持った方がいいよ」
「自信？」
「そ。沼田ちゃんがあの二人を怖いと思うのは、自信がないからじゃない？」
それは……そうかもしれない。
「沼田ちゃんは頑張っているんだから、その頑張りを認めてあげないと」
そんなことできたら、苦労しないよ。
「あたしはね、可愛いねとか、なんでもできるよねとか、言われても謙遜なんかしない。
だって、たくさん努力してるから」
努力。そんなものとは無縁の人だと思っていたのに。
「自分の頑張りを認めて、ちゃんと褒めれば、自信は勝手についてくる！」

一人で、帰り道を歩く。ヒヨドリの鳴き声がして上を向くと、澄んだ空にうろこ雲が浮か

んでいた。まだ暑いが、少しずつ秋の足音が聞こえてきているようだ。
アカネちゃん。彼女が努力をしていたなんて、初めて知った。どうして、彼女は生まれた時から蝶なんだと思い込んでいたのだろう。なぜ、自分は一生イモムシのままなのだと諦めていたのだろう。
みんな、イモムシからサナギを経て、蝶へと変わっていくのに。
「私も……」
私も、蝶になりたい。アゲハ蝶みたいな、大きく派手な蝶でなくていい。モンシロチョウやシジミ。小さくて、派手ではないが可愛らしさのある、そんな蝶に……。
複数人の女子の話し声が聞こえてきて、顔を上げる。アケビの家の近くまで来ていた。
アケビは、同じ部活の同級生で、キャプテンをしている。
庭に出ているようだ。こっそり木の陰からのぞくと、同じ部の一年と二年が合わせて十人ほどいた。
自主練だ。「今日も五時まで頑張ろうね」と、そんな声かけが聞こえる。
毎週月曜日は部活がない。なのに、練習しているの？　毎週放課後、何時間も？　二年生の子は、去年も毎週月曜にアケビの家に行っていた気がする。遊んでいるんだと思っていたけれど、一年生の時から自主練していたの？
「……」
上手になって当然だ。私は自主練なんて、数えるほどしかしてこなかった。
アカネちゃんにも、アケビにも、私はずっと嫉妬していた。彼女らの努力も知らず。
そのほうが楽だからだ。私は、自分が努力していないことを認めるのが嫌だった。
長く伸びた自分の影を見つめる。ヒグラシが鳴いている。
私は、きっと。きっと、変われる。
夕日に向かって、大きく一歩、踏み出した。

風が優しく頬を撫でる。
十月の初め、夕方の帰り道。二年生もいいかもしれない、と最近になって思い始めた。
九月のあの日から、私は変わろうと努力した。アケビを見習って自分を磨いた。自分に自信がついてきて、クラスメイトはやっぱり怖いけど学校はそこそこ楽しい。
私、イモムシからサナギくらいには進化できたんじゃないだろうか。
タタン、タタン、タタン。
軽快な音を立てて電車が前へと流れていく。
黄色く色づいたイチョウの葉が風に吹かれ、花びらのように茜色の空に舞った。